

『世界経済大いなる収斂』 リチャード・ボールドウィン 遠藤真美訳

日本経済新聞社 2018 年

序章

- ・ 1990 年前後からグローバリゼーションの性質が変化した。
- ・ 1990 年以前：オールド・グローバリゼーション：世界の所得に占める豊かな国とその他の国の格差が拡大（大いなる分岐：グレート・ダイバージェンス）（図 1）
- ・ 1990 年以降：ニュー・グローバリゼーション：世界の所得に占める豊かな国と新興市場国の格差が縮小（大いなる収斂：グレート・コンバージェンス）（図 2）
- ・ 19 世紀以前は生産と消費が結びついていた（バンドリング）。このバンドリングを段階的に解いていく（アンバンドリング）のがグローバリゼーションと考えることができる。（図 3）
- ・ グローバリゼーションを推進した 3 つの重要な要素：（1）モノを移動させるコスト、（2）アイデアを移動させるコスト、（3）ヒトを移動させるコスト。
- ・ 本書の目的・意義：これらのコストに着目することで、グローバリゼーションの進展および背後にある要因を明らかにすると共に、経済への影響を考察し、先進諸国および途上国に対して政策的含意を提供する。

第 I 部 グローバリゼーションの長い歴史をざっと振り返る

- ・ グローバリゼーションを 4 つの局面に分ける
 - フェーズ 1：人類が地球上に広く拡散する（紀元前 20 万～約 1 万年）
 - フェーズ 2：グローバル経済がローカル化する（紀元前 1 万年～紀元 1820 年）
 - フェーズ 3：ローカル経済がグローバル化する（1820 年～1990 年頃）（**第一のアンバンドリング**）
 - フェーズ 4：工場がグローバル化する（1990 年～現在）（**第二のアンバンドリング**）

第 1 章 人類の拡散と第一のバンドリング

- ・ フェーズ 1：生産とは命をつなぐために食料を確保すること。人々は食料がある所に移っていった。生産と消費のバンドリング。農業革命が終わるとフェーズ 1 は終わる。
- ・ フェーズ 2：農業革命により生産が消費の場に移動する。世界経済がローカル化した。気候の温暖化によって穀物栽培に適した地帯（北緯 30 度前後）に人が集まり古代文明が起こった（エジプト、メソポタミア、インド・パキスタン、中国）。シルクロードができてユーラシアがひとつに繋がる。生産と消費のクラスター形成。（図 12）
- ヨーロッパの台頭：ルネサンス・啓蒙思想、大航海時代（図 15）

第2章 蒸気革命とグローバリゼーションの**第一のアンバンドリング**

- ・フェーズ3：**第一のアンバンドリング**、オールド・グローバリゼーション
輸送技術のブレークスルー：蒸気革命=>貿易コストの大幅な低下（蒸気船、鉄道）、工業化の進展、遠くはなれたところで作られたモノを消費することが経済的に見合うようになった。（図17）
- ・消費地と生産地の切り離し。貿易、集積、イノベーションが相互に結びつく現象が生まれた。
- ・グローバリゼーションの進展：(1) 第一次大戦前における進展、(2) 戦間期における後退（図21）、(3) 第二次大戦後における急速な進展（図22）
- ・**第一のアンバンドリング**がもたらした結果：(1) 南北格差の拡大（図16、18）、(2) 国際貿易の進展、(3) 北で都市化の進展

第3章 ICTとグローバリゼーションの**第二のアンバンドリング**

- ・フェーズ4：**第二のアンバンドリング**、ニュー・グローバリゼーション
- ・ブレークスルー：ICT革命、航空貨物輸送の発展、貿易・投資の自由化
- ・ICT革命：1986年から2007年：世界の情報保存能力、年23%増、電気通信量、年28%増、計算能力、年58%向上
- ・複雑なプロセスを遠く離れたところから調整するコストの低下
- ・製造プロセスの国際分散：労働集約型の生産工程の高賃金国から低賃金国への移転（オフショアリング）、オフショアに移された生産工程への高度なノウハウの移転。
- ・**第二のアンバンドリング**がもたらした結果：(1) G7諸国の空洞化、一握りの発展途上国の工業化（図23, 25, 26）。(2) 特定の地域への集中。(3) 大いなる収斂（図27）。(4) ほとんどの発展途上国で貿易、投資、資本、サービス、知的所有権に関する政策が大幅に自由化された（図30、31）。(5) 生産のノウハウの分布における不均衡が縮小。

第II部 グローバリゼーションのナラティブを拡張する

- ・グローバリゼーションの各フェーズの理論的説明

第4章 グローバリゼーションの三段階制約論

- ・経済活動の分布は偏っている。経済活動における距離の重要性を示す。
- ・モノ（第一の制約）、アイデア（第二の制約）、ヒト（第三の制約）の移動における制約がグローバリゼーションに影響を与える。
- ・グローバリゼーション以前は、これらの移動コストが高かったことから、消費地と生産地は近くにある必要があった。
- ・モノ、アイデア、ヒトの移動コストは順番に小さくなっていった。
- ・**第一のアンバンドリング**：モノの輸送コストの大きな削減（第一の制約の緩和）
- ・生産と消費の分離が可能。資源や財が世界に不均等に存在していたことから、貿易が利益を生むようになった。主要7カ国（G7）は製造業に特化し、産業集積が進み、イノベーション

が生まれ、競争力を高め、さらに産業集積が進んだ。その結果、主要 7 カ国と他の国々との所得格差が拡大した。

- ・グローバリゼーションの第一の加速期のメンタル・モデル

ディビッド・リカードの比較優位理論：各国は得意な商品の生産に特化すると共に輸出し、不得意な商品を輸入する。第一のアンバンドリングの特徴の説明には、リカードの理論に産業集積のメリットを追加しなければならない。具体的には、クルーグマン・ヴェナブルズ・藤田によって開発された「新経済地理学」の要素をからめて議論を展開する。

- ・ **第二のアンバンドリング**：ICT 革命による通信コストの削減（第二の制約の緩和）
- ・ 1980 年代後半、通信コストが劇的に低下。90 年代にはインターネットの出現。
- ・ 第一のアンバンドリングの結果、南北間に大きな賃金格差が生じた。そこで ICT 革命がオフショアリングの扉を開くと、第二のアンバンドリングにより生産は国際的に分散した（ドイツは中央・東ヨーロッパ：ファクトリー・ヨーロッパ、アメリカはメキシコ：ファクトリー・ノースアメリカ、日本は東南アジア：ファクトリー・アジア）（ファクトリー・ワールドは形成されなかった）アイデア・知識（ノウハウ）が北（G7）から南（I6：新興工業経済 6 地域）へと移動した。世界の製造業が北から南へとシフトした。
- ・ 1990 年代以降に生じた国際生産の再編成は 19 世紀のそれとは、本質的に異なっている。G7 の国々は国内にノウハウを蓄積し、国内のサプライチェーンを構築して、競争力を高めたが、I6 は地域生産ネットワークに加わることで競争力を身につけた。

第 5 章 何が本当に新しいのか

- ・ 比較優位の無国籍化：オールド・グローバリゼーションのもとでは、比較優位の原理に基づいて、各国の強みは産業ごとに異なっていた。競争の前線は国境線であった。
- ・ ニュー・グローバリゼーションのもとでは、競争の前線は、複数の国にまたがる生産ネットワーク（グローバル・バリュー・チェーン）にある。
- ・ 20 世紀型貿易：モノの輸出では、輸出国の生産要素、テクノロジー、社会資本、統治能力などをひとまとまりにした「パッケージ」の輸出
- ・ 21 世紀型貿易：次の要素が結びついている（1）部品・コンポーネント貿易、（2）生産施設、人員、ノウハウの国際移動、（3）分散化された生産を調整するために必要なサービス（特に、電気通信、インターネット、特急宅配便、航空貨物、貿易金融などのインフラサービス）
- ・ 価値のサービスへのシフト：スマイルカーブの底が深くなる（図 46）。
- ・ **第二のアンバンドリング**によって、組立製造工程（途上国で行なわれる）がコモディティ化した。
- ・ 新しい勝者と新しい敗者の誕生：オールド・グローバリゼーションでは、豊かな国の高技能労働者が勝ち、豊かな国の低技能労働者が負けた。ニュー・グローバリゼーションでは、豊かな国のノウハウを持っているものが得をする。発展途上国では流入したノウハウを使用する未熟練労働者の生産性が上がる。その結果、豊かな国の最も所得の高いヒトと世界の中間

層の所得が上昇した。図 48（エレファントカーブ）

- ・先進国では、高技能労働者の職は継続、中技能労働者にとってオフショアリングで難しい状況、低技能労働者の職は安定
- ・荒々しくなるグローバリゼーション：
- ・（１）グローバリゼーションが個別化した。競争はセクターレベルから工程レベルにシフトした。途上国の低賃金労働者が先進国の工場やオフィスの労働者と直接競争するようになる。**第二のアンバンドリング**で、G7 の労働力・知識チームがばらばらに切り離された。この結果、国の利益と企業の利益が一致しにくくなった。アメリカの労働者がアメリカ企業のノウハウを独占的に使う環境が崩れた。
- ・（２）グローバリゼーションの変化が急激になる。**第一のアンバンドリング**の影響は、年単位で変化が進んだ。**第二のアンバンドリング**の影響は、変化が急である。第一のアンバンドリングをもたらした貿易コストの影響は時間がたってもあまり変化がなかったが、**第二のアンバンドリング**をもたらした情報通信技術の変化は急速である。また、**第二のアンバンドリング**は工程レベル、職務レベルでの変化なので、予想が難しい。

第III部 グローバリゼーションの変化を読み解く

- ・経済学の観点から、第一のアンバンドリングと第二のアンバンドリングが経済にどのような影響を与えたのか、なぜ、それがこれほどまでに違うのかを解き明かす。

第6章 グローバリゼーション経済学の基礎

- ・4つの経済ロジック：
- ・リカードの比較優位の理論、新経済地理学、内生的経済成長理論、情報通信技術（ICT）
- ・比較優位の理論：交換の利益、生産特化による利益、規模の経済による利益
グローバリゼーションの功罪：二つの対立軸：①消費者対生産者、②熟練労働者対未熟練労働者
- ・グローバリゼーションに痛みなき利益はない。このジレンマを解決するには、すべての市民が恩恵と痛みを分かち合うようにする「社会契約」を作り上げなければならない。
- ・新経済地理学（NEG）：空間発展が不均等になることの説明。企業による立地の決定に焦点を当てる。
- ・分散力：経済活動を様々な地域に分散させようとする力（都市部の渋滞、高い賃料など）
- ・集積力：経済活動を一つの地域に引き寄せようとする力（供給側の需要側の要因：後方連関・前方連関、顧客がいると生産者が集まり、生産者の労働者が顧客になって、さらに企業が集まってくる。中間財のサプライヤーが集積すると、最終生産者が集まっている。最終生産者が集まってくると中間財サプライヤーが集積する。
- ・内生的成長：知識の創造はスピルオーバーを生み出し、将来のイノベーションを促進する。イノベーションは収穫逨減を回避する鍵になることから（学習曲線）、イノベーションは成長を永遠に牽引することができる。
- ・細分化（バリューチェーンを切り分ける） ICT は通信技術と組織技術に影響を及ぼす。ICT

は調整技術（CT）と情報技術（IT）に分けられる。CTは調整コストを引き下げるので、細分化が進む。一方、ITはオートメーションを可能にすることから、ITが進むと、数多くのタスクをグループ化し、一つの職種にまとめるコストが下がることから、特化を抑制する。ICTが向上すると、職種当たりのタスクが増えることもあれば減ることもあり、工程当たりの職種も、増えることもあれば減ることもある。

- ・ オフショアリング：企業はあらゆるコストを考慮したうえで、個々の生産工程をコストがいちばん低い立地に移そうという原理に従っている。オフショアリングのコストは「分離」コスト、利益は生産コストの低下。

第7章 グローバリゼーションのインパクト その変化を解き明かす

- ・ 変化に関する重要な事実を明らかにする。

- ・ 第一のアンバンドリングの定型化された事実を読み解く

- ・ 北は工業化し、南は空洞化：北の工業化＝>所得上昇＝>市場規模の拡大＝>産業立地の魅力上昇＝>工業化加速、知識のスピルオーバーが北に限定されていた。イノベーションが北で活発に行なわれた。（図54）

- ・ 貿易の活発化

- ・ 大いなる分岐が起きた

- ・ 都市化が特に北で加速した：都市は通信コストを節約する。

- ・ 第二のアンバンドリングの定型化された事実を読み解く

- ・ 北が空洞化する一方、一握りの発展途上国が工業化した：知識のスピルオーバーが集積力として作用していたが、第二のアンバンドリングで分散力として機能し始めた。自社のノウハウを近隣の発展途上国の低賃金と組み合わせることで、南が魅力的な生産地になりつつある。

- ・ 急速に工業化した国で成長が加速した

- ・ コモディティ・スーパーサイクルが生まれ、商品輸出国の成長が離陸した：I6の所得上昇により商品需要が刺激され、小麦から原油まで、商品価格が吊り上げられた。

- ・ 大いなる収斂が起きた

- ・ 北—南の貿易の性質が変化し、往復貿易が急増した

- ・ ほとんどの発展途上国が貿易を自由化した

- ・ 影響が及ぶ地理的範囲は非常に限られた：北の国から遠く離れすぎている国や、国際生産ネットワークに加わるために必要はこと（モノ、ヒト、アイデア、投資の双方向のフローを推進するような貿易・投資・サービス・知的所有権に対する政策を確立すること）をしなかった発展途上国は変化が見られなかった。

- ・ 新しい開発パターンは、以前の開発理論（発展段階説）とは異なっていた。

- ・ 成長の恩恵を受けたのは、19世紀・20世紀では、世界人口の5分の1であったが、21世紀では、人類の約半分に波及した。

第Ⅳ部 なぜそれが重要なのか

- ・従来は政策を考えるに当たってセクター（部門）レベルで考えていた。比較優位を持つ部門といったように。そこで競争力のある部門の拡大などを狙った政策が実施されてきた。それは現代のグローバリゼーションには当てはまらない。第Ⅳ部では、政策を見ていく。

第8章 G7のグローバリゼーション政策を見直す

- ・政府としては、粘着性の強い要素（国際的移動が難しい要素）と強いスピルオーバーある要素の養成・育成が重要（図55）
- ・粘着性の弱い要素は海外から獲得することが可能、海外へ移動してしまう
- ・人的資本（スキルの柔軟性を持った人的資本）の重要性
- ・スマイルカーブにおいて価値がサービス部門にあることが分かる。21世紀の産業政策では工業セクターの比重を下げ、サービスの比重を上げるべき。製造業のサービス化が進むと、国の輸出財の競争力は、さまざまなすぐれたサービスを妥当な価格で利用できるかどうかによって左右される。先進国の産業政策は製造業に関連するサービスを育てることも視野にいれなければならない。
- ・先進国は、科学者やエンジニアの活躍の場になる。
- ・優秀な人材は都市に集まり、生産性を高める。
- ・貿易政策：
 - ・第一のアンバンドリング：国の企業が海外でもっと売れるように手助けすること
 - ・第二のアンバンドリング：グローバル・バリューチェーンがうまく機能するようにすることを目指すなければならない。先進諸国にとっては、自国の企業が有形資産と無形資産の価値を最大化するのを後押しする貿易ルールを策定すること。
- ・二種類の規律
 - ・（1）海外でビジネスを展開しやすくするための措置（知的財産権保護、設立権、反競争的慣行の防止、資本フローに関する保障）
 - ・（2）国際生産施設が一つにつながった状態を維持する措置（インフラサービス、国境措置、ヒト、モノの国際移動を可能にする措置）
- ・具体的には、TPPのような深い地域貿易協定が必要

第9章 開発政策を見直す

- ・開発理論の2つの波と1つの降伏（第一のアンバンドリングから第二のアンバンドリングへの移行において）
- ・第一の波：ビッグ・プッシュ、輸入代替工業化
- ・第二の波：ワシントン・コンセンサス、自由市場重視
- ・降伏：ビッグ・アイデアを追い求めることをあきらめること。
- ・第一のアンバンドリングでは、国内でサプライチェーン全体を構築しなければならなかった。
- ・経済発展のはしご（発展段階説）：非耐久消費財⇒中間財⇒耐久消費財⇒生産財、それぞれが輸入を国内生産で代替していく。（雁行形態的發展）（図61）

- ・ **第二のアンバンドリング**では、工業化をセクターレベルではなく、工程レベルで進めていくことができるので、工業化政策は実施しやすくなった。ビッグ・プッシュではなく、スモール・ナッジを繰り返すことで工業化を実現することができるようになった。(ムクドリ)
- ・ 新たな課題・疑問：(1) どのグローバル・バリューチェーンに加わるべきか、(2) どうすればグローバル・バリューチェーンの参入および拡大が可能になるのか、(3) どうすればグローバル・バリューチェーンへの参入を持続可能な経済発展に結びつけることができるのか？
- ・ タイの成功とマレーシアの失敗：自動車産業 (図 57)
- ・ タイ：グローバル・バリューチェーンへの参加。組立メーカーとサプライヤーが日本から進出した。
- ・ マレーシア：組立メーカーおよびサプライヤーを国内企業の育成を図った。
- ・ どのようなバリューチェーンに参加するか？
- ・ 工程の選択：地理的要素を考慮。
- ・ 生産者主導型バリューチェーン：電子電気、自動車など (生産押し上げ効果が大きい)
- ・ 買い手主導型バリューチェーン：繊維製品 (生産押し上げ効果は限られている)
- ・ グローバル・バリューチェーン参入問題
- ・ (1) 参入を促すようなビジネス環境の整備 (例えば、財産権の保護)
- ・ (2) モノ、ヒト、カネが国際間を移動しやすい環境。
- ・ 拡大の問題
- ・ 前方連関および後方連関を考慮
- ・ 学習効果を通じた質の向上の実現
- ・ 持続的な経済発展実現へ向けて
- ・ 人の質の向上、ハードおよびソフト・インフラの整備、社会および政治の安定、公平な分配など

第IV部 未来を見据える

- ・ グローバリゼーションがこの先どう変化する可能性があるかについて考える。変化は急激で、破壊的な力をもつものになりそうである。

第10章 グローバリゼーションの未来

- ・ グローバリゼーションの将来については、ヒトを移動させるコストが下がらない限り、新たな変化は訪れない。技術の進歩で人々が移動しなくても、それらの人々の労働サービスが提供されるようになれば、大きな変化が期待できる。
- ・ 3段階制約論について将来予測
- ・ 貿易コスト：1930年型の保護主義は発生しないのではないか。国際生産ネットワークに関与している国では、保護主義的な動きは起きないのではないか。
- ・ 通信コスト：技術進歩、ICT革命などの進行が予想されることから、通信コストは継続的に低下する。政治的に通信コストを上げることは可能である。

- ・ICT 革命：情報技術（IT）と通信技術（CT）はオフショアリングの影響では逆の効果。CT が進化すると、細分化のコストが下がり、細分化が促される。他方、IT が進化すると、細分化する必要性が薄れて（多くのタスクを一つの職種にまとめることが可能になり 9、細分化が抑制される。
- ・製造過程だけではなく、新商品の設計・試験や流通・アフターサービスでもコンピューター化が進む。
- ・対面コスト：継続的に低下する。ICT の発達により、人間の分身が人の集まる会議に出席するようになる。テレプレゼンス、ホログラフィック・テレプレゼンス（立体画像）、テレロボティクス（人間と機械との相互作用）、自動翻訳の急速な進化（言葉の壁の低下）（第三のアンバンドリング）
- ・生産アンバンドリングの未来
- ・製造業の仕事は G7 から発展途上国に流れ続け、流入先となる発展途上国は広がりを見せる。マスカスタマイゼーションや 3D プリンティングはアンバンドリングにとって逆風。
- ・未来のオフショアリング先：生産工程の地理的アンバンドリングは、分散力と集積力のバランスで決まる。賃金が重要な要素。賃金の上昇はオフショアリング先に繋がらない。今後は、アフリカの東海岸へ広がっていくのではないか。
- ・高技能労働者とロボットは、G7 諸国の工場で仕事があるが、低技能・中技能の労働者の仕事なくなるか、職場がオフショアに移される。労働市場の二極化
- ・第三のアンバンドリング
- ・第三のアンバンドリングは、労働サービスを労働者から物理的に切り離す。
- ・テレプレゼンス、テレロボティクス、自動翻訳機など：発展途上国の低技能労働者（例えば、清掃者や警備員）が豊かな国にテレコミュートし、豊かな国の高技能労働者（例えば技術者）が発展途上国にテレコミュートする。
- ・第三のアンバンドリングでは、第二のアンバンドリングが製造業に与えた影響を、サービス業に与える。
- ・今日のグローバリゼーションは読者の親の世代のグローバリゼーションとは違う。明日のグローバリゼーションは今日のグローバリゼーションとも違う。
- ・今後は、バーチャルプレゼンス革命が引き金になって、テレプレゼンスとテレロボティクスのコストが下がり、最大の原動力になる。

付録

国のグループ別分類：

A7：古代文明 7 カ国（中国、インド/パキスタン、イラク、イラン、トルコ、イタリア/ギリシャ、エジプト）

G7：先進 7 カ国（アメリカ、日本、ドイツ、フランス、イタリア、イギリス、カナダ）

I6：新興工業経済 6 地域（中国、韓国、インド、インドネシア、タイ、ポーランド）

R11：新興 11 カ国（中国、インド、ブラジル、インドネシア、ナイジェリア、韓国、オーストラリア、メキシコ、ベネズエラ、ポーランド、トルコ）

まとめと議論するテーマ

付録図 2

・これまでのグローバリゼーション

第一のアンバンドリングと第二のアンバンドリングで世界経済は急成長を実現した。

第一のアンバンドリング：北の成長が世界経済の成長を牽引した。

第二のアンバンドリング：一部の南の国々の成長が世界経済の成長に貢献した。北の国々では、一部の南の国々による追い上げによって、イノベーションが加速され、成長に繋がった。

・これからのグローバリゼーション

第二のアンバンドリングの継続：恩恵を受ける地域の拡大（例えば、中南米、アフリカ）、中国による一帯一路構想

懸念要素：保護主義の台頭、国内における所得格差の拡大

・第三のアンバンドリング

・人のバーチャルの国境移動（労働サービスの国境移動）：テレプレゼンス、ホログラフィック・テレプレゼンス（立体画像）、テレロボティクス（人間と機械との相互作用）、自動翻訳の急速な進化（言葉の壁の低下）

・イノベーション：低技能労働者（単純労働）、中技能労働者の労働がロボットにより代替される

・製造業のサービス化の進展：スマイルカーブ

・サービス貿易の拡大：高技能労働者に対する需要が国内外で拡大し、報酬も上昇する。一方、低技能労働者、中技能労働者に対する需要は低下することから、所得格差は拡大する。

・保護主義台頭の恐れ：低技能労働者や中技能労働者に雇用機会が与えられなければ、また、所得の再配分が行なわれなければ、保護主義が台頭し、グローバリゼーションが抑制される。

図1 グローバリゼーションは1990年頃に変化した：
「衝撃的なシェア・シフト」(世界の所得に占めるG7のシェア)

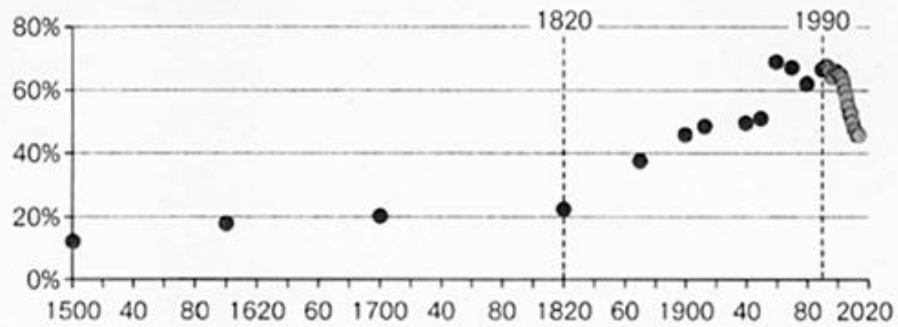


図2 世界の製造業に占める豊かな国のシェアの低下分は、
わずか六つの発展途上国の上昇分に転換した

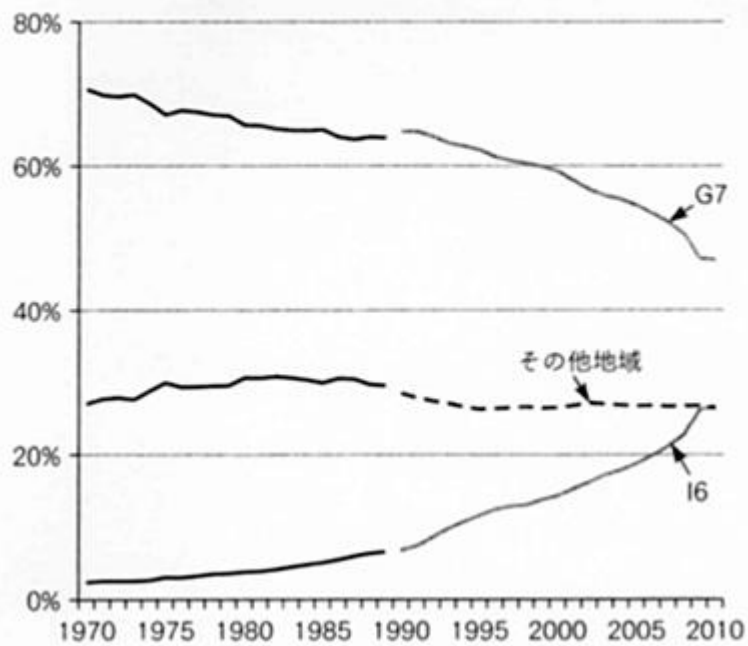


図3 グローバリゼーション「三段階制約」論の構図

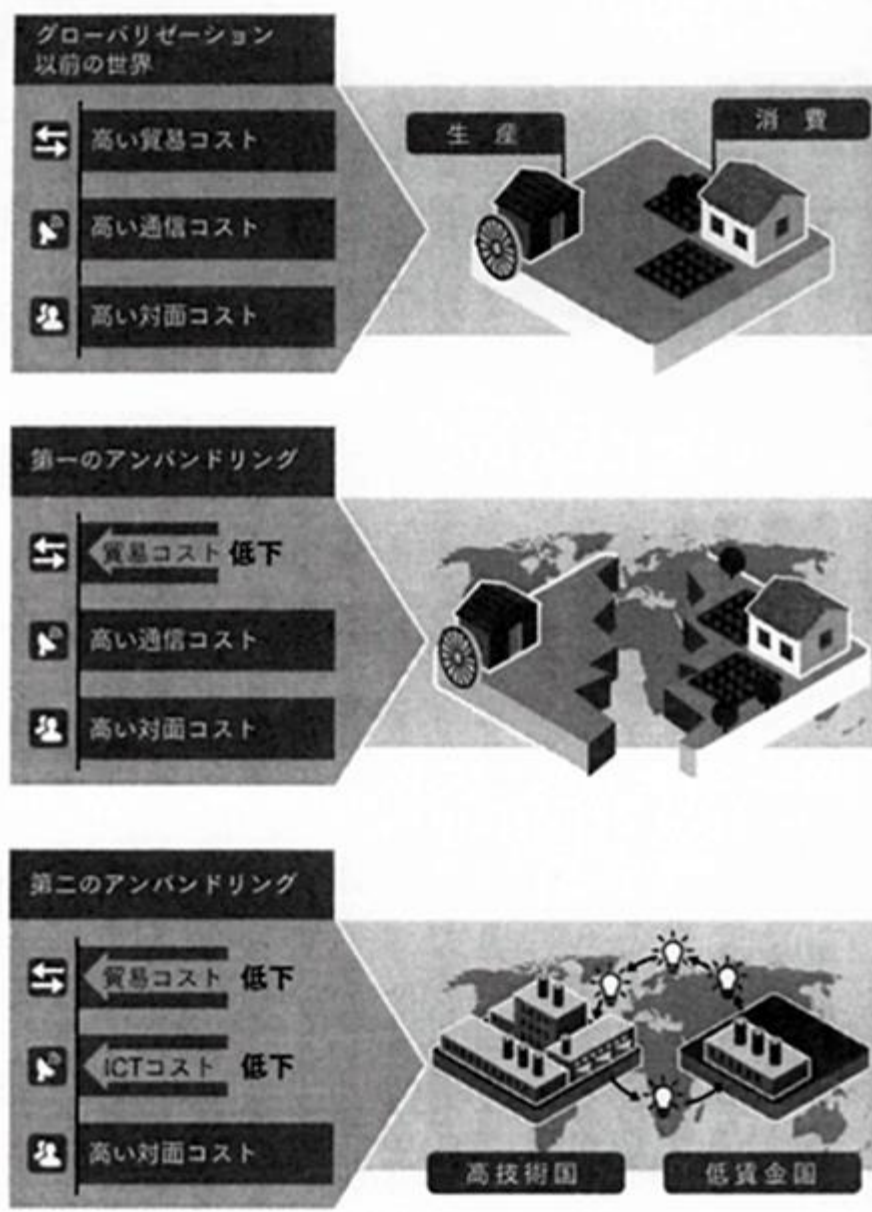


図12 生産と人口の世界シェア：紀元1500年にはアジアが世界を支配していた

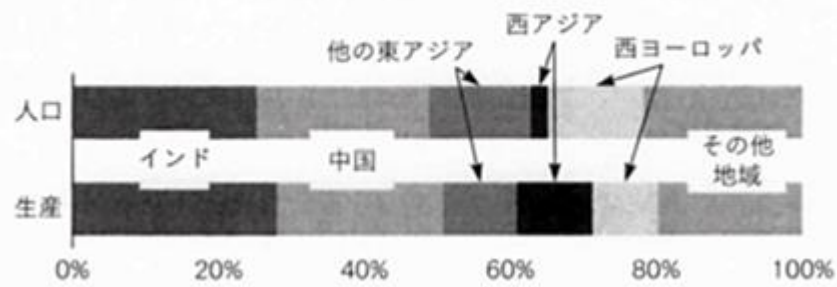


図15 1820年のアジアの世界経済支配(世界所得に占めるシェア)

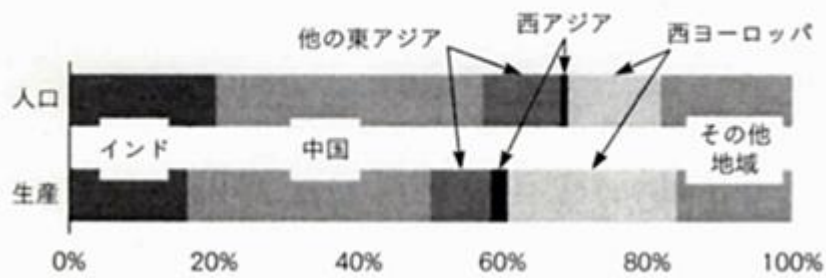


図17 世界貿易コストと貿易量、1745～1990年

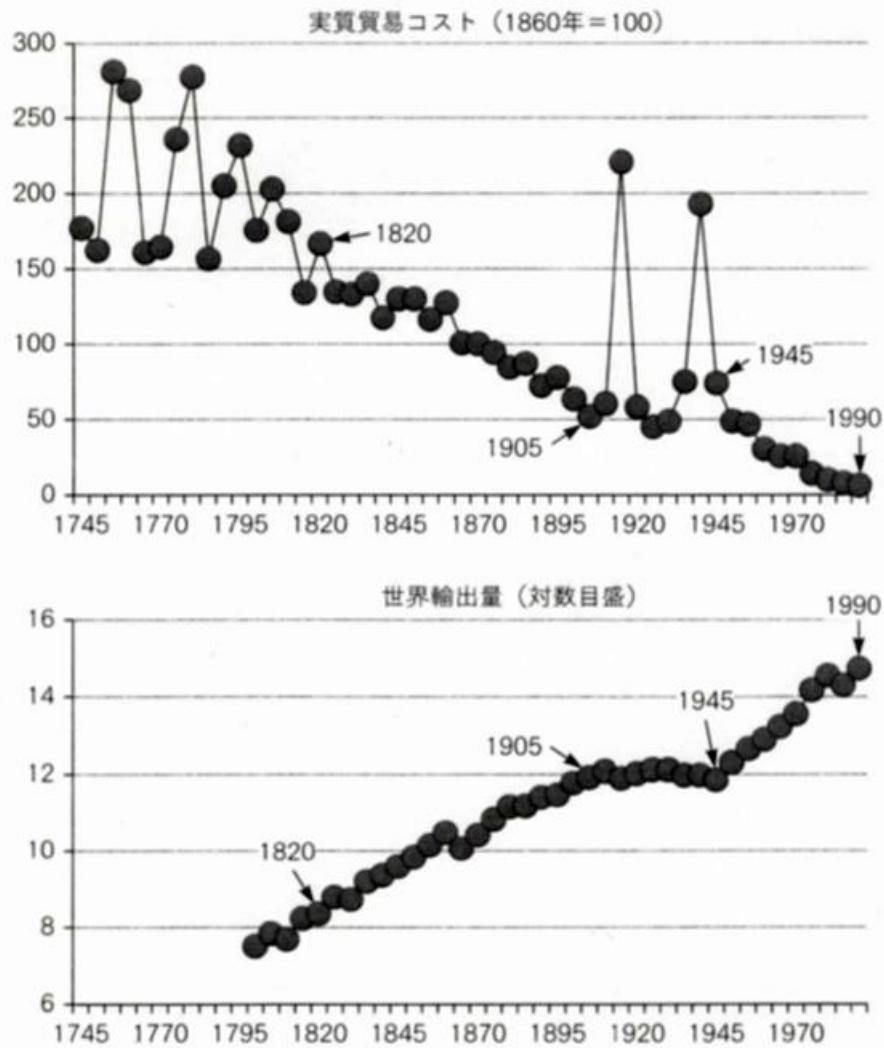
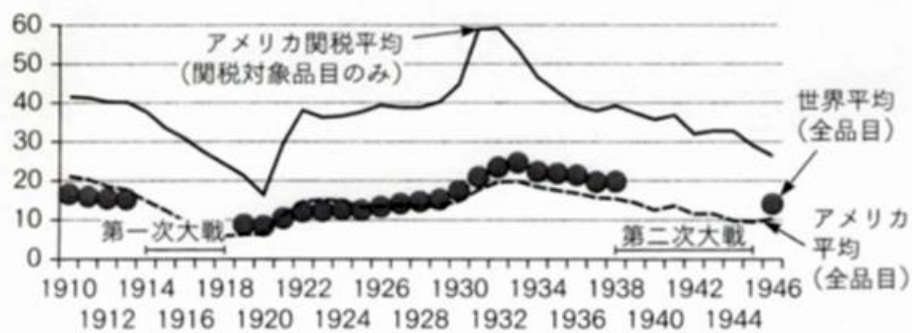


図21 世界とアメリカの平均関税、1910～1946年



*The contracting spiral of world trade, January 1929–
March 1933: Total imports of 75 countries (monthly values in
terms of old U.S. gold dollars [millions]).*

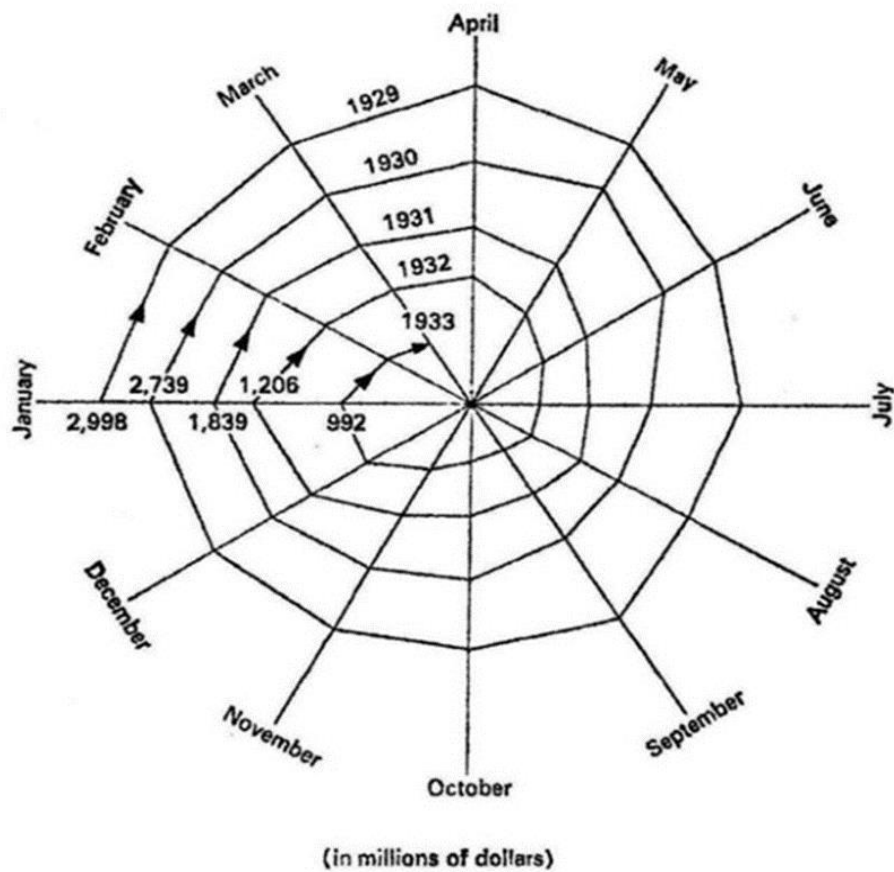


図22 先進国、発展途上国の平均関税率、1950～1994年

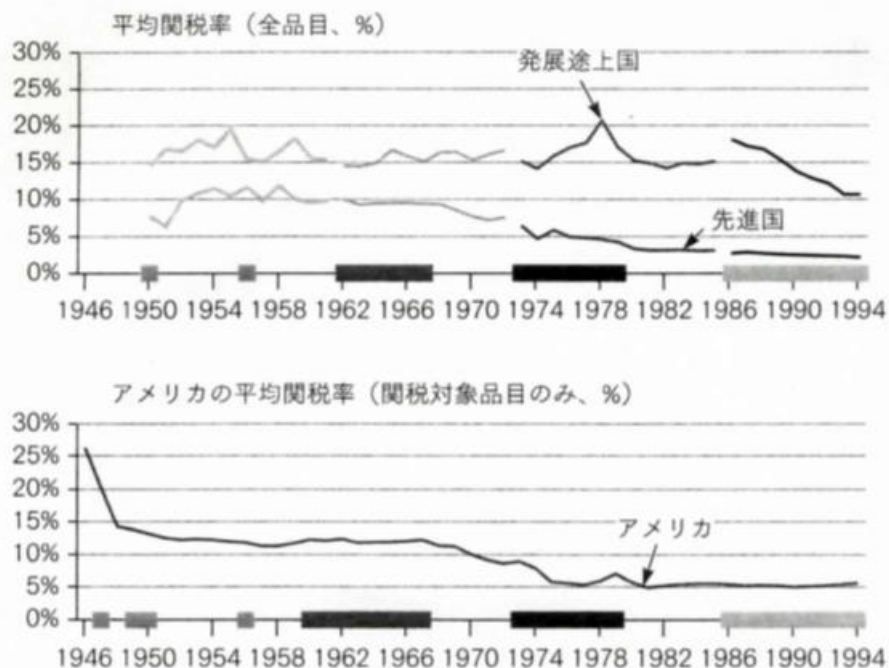


図16 古代7ヵ国(A7)と先進7ヵ国(G7)が世界GDPに占めるシェア、1820～1990年

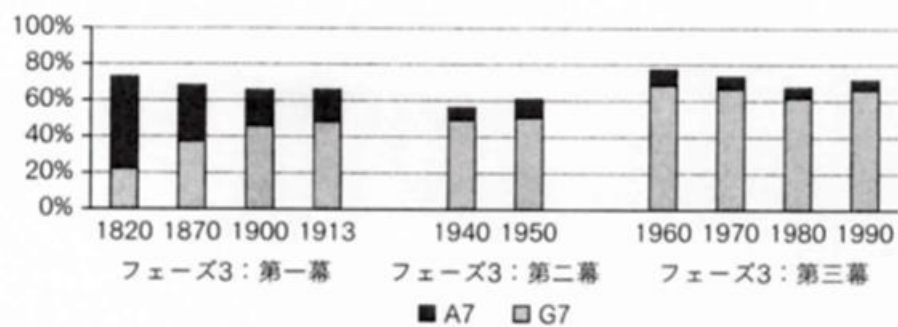


図18 国民一人当たりの工業化水準、1750～1913年

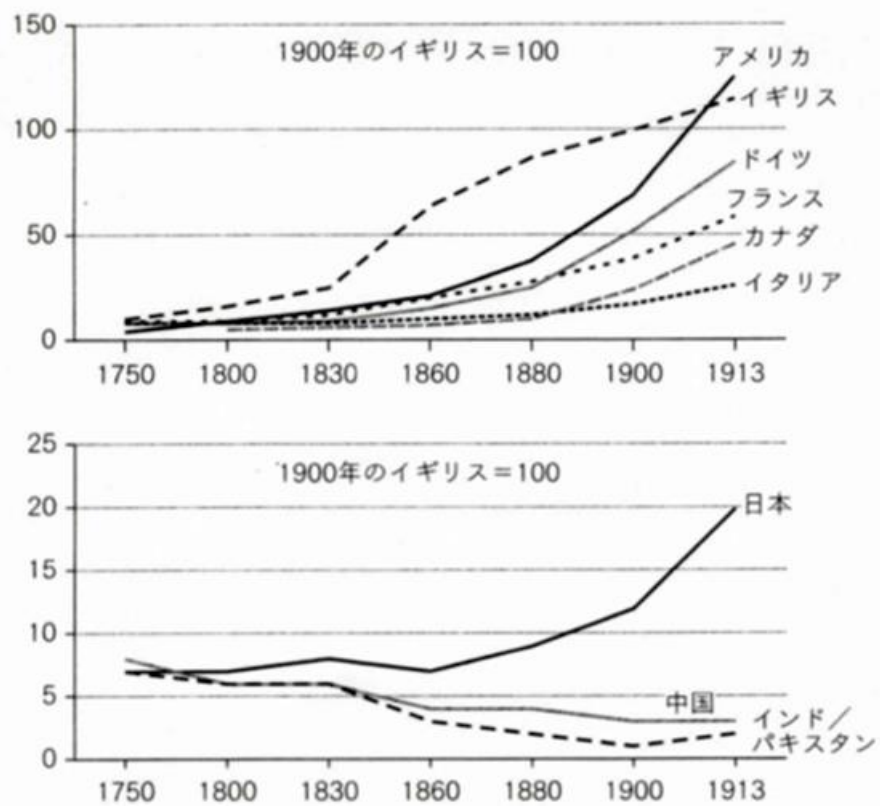


図23 フェーズの移行時期を特定する：世界GDPのシェア、1000～2014年

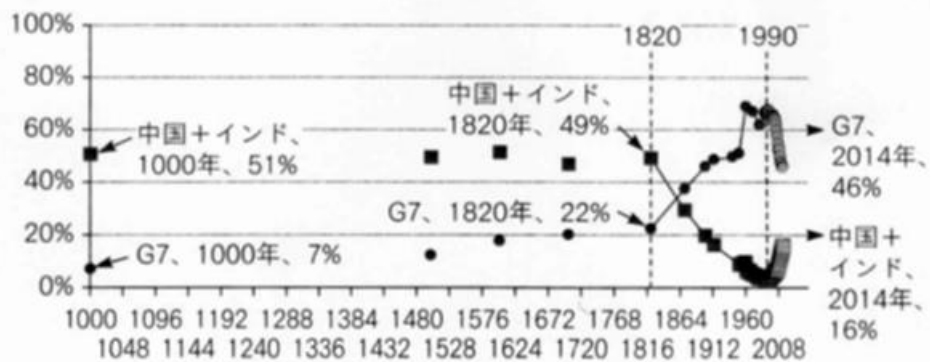


図25 製造業の逆転：G7の世界製造業シェア、1970～2010年

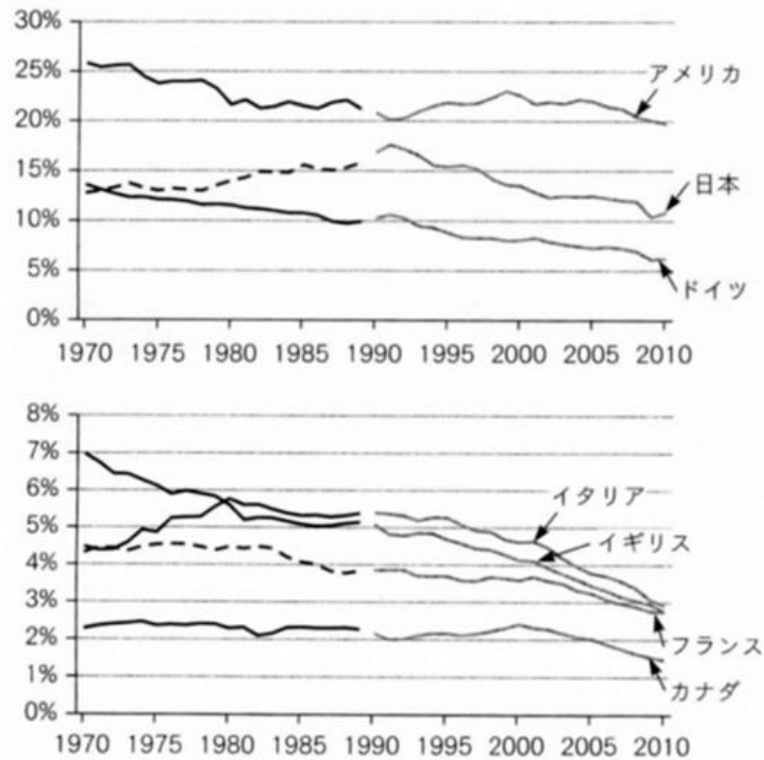


図26 新興工業経済6地域の世界製造業シェア、1970～2010年

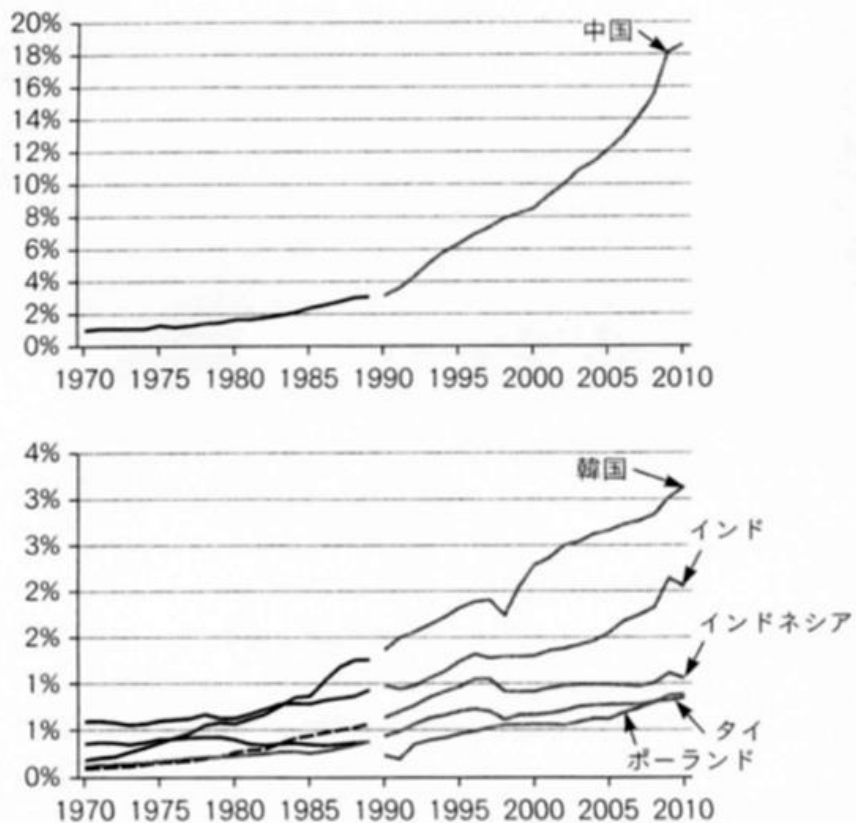


図27 G7、R11、中国：グローバルGDPシェアの再配分、1960～2010年

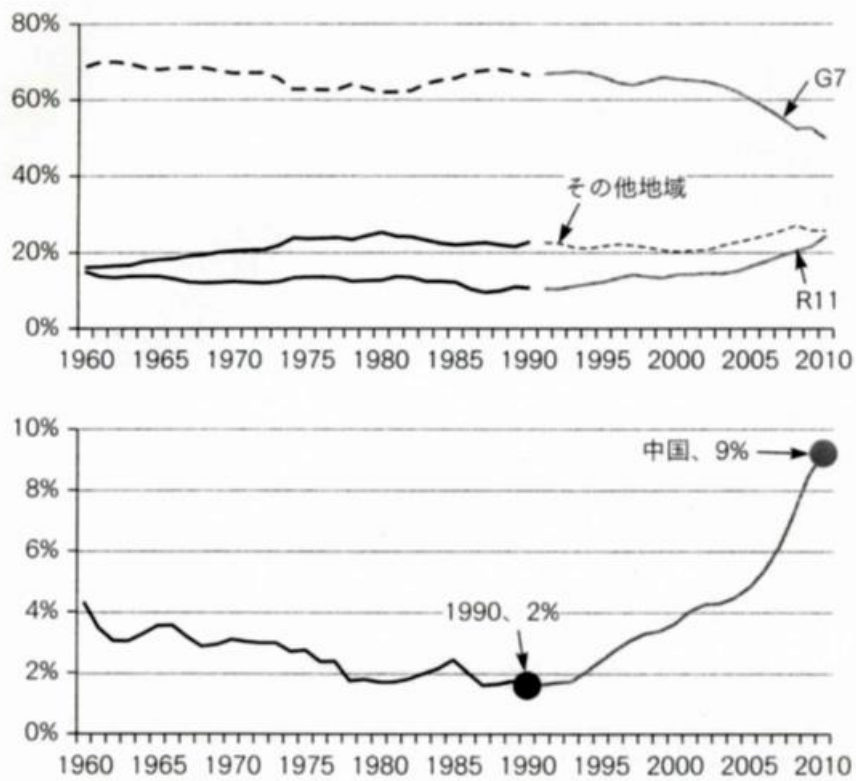


図30 1985年以降の発展途上国による一方的関税自由化

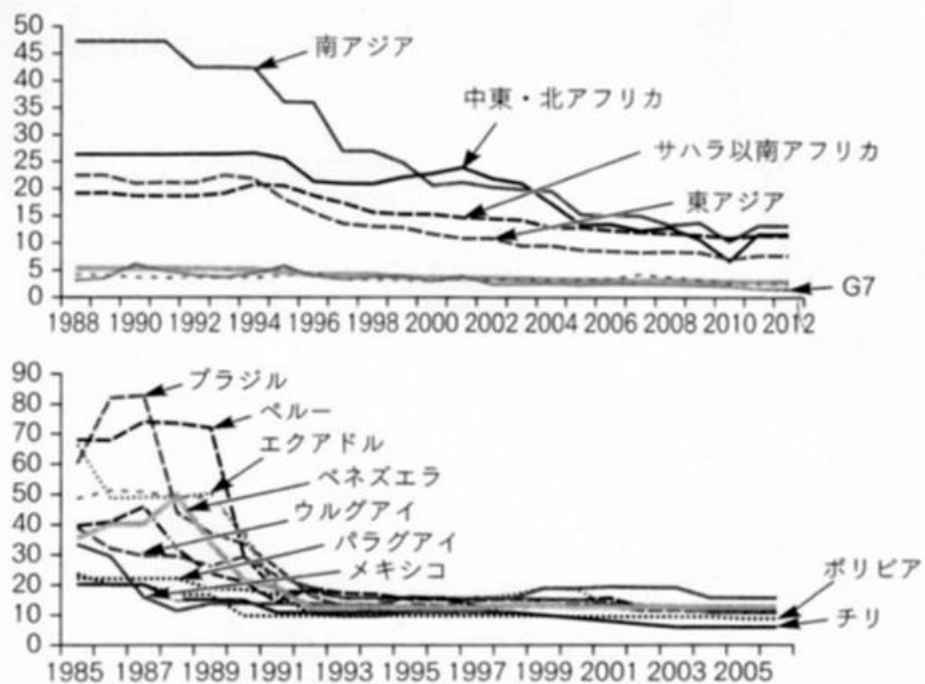


図31 二国間投資協定は1990年から爆発的に増加した

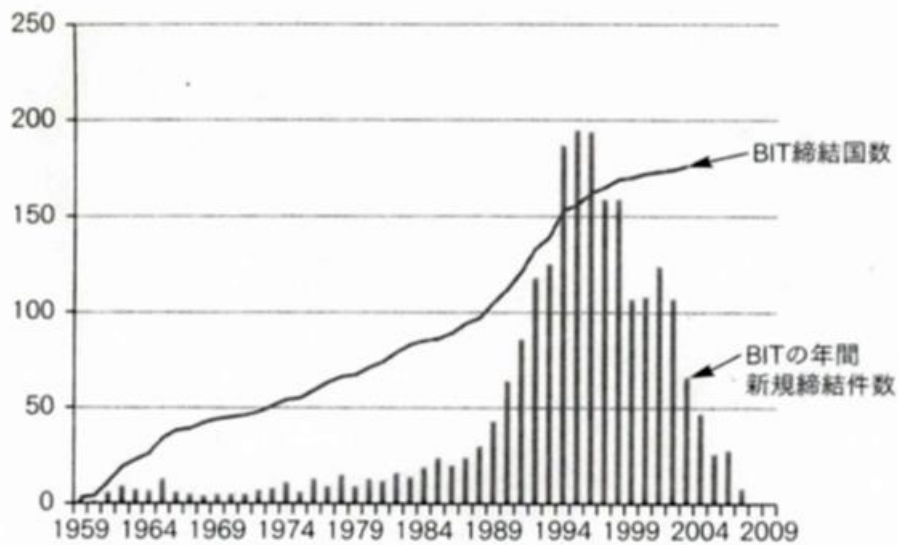


図46 スマイルカーブ：第二のアンバンドリングによってバリューチェーンの価値はどうシフトしたか

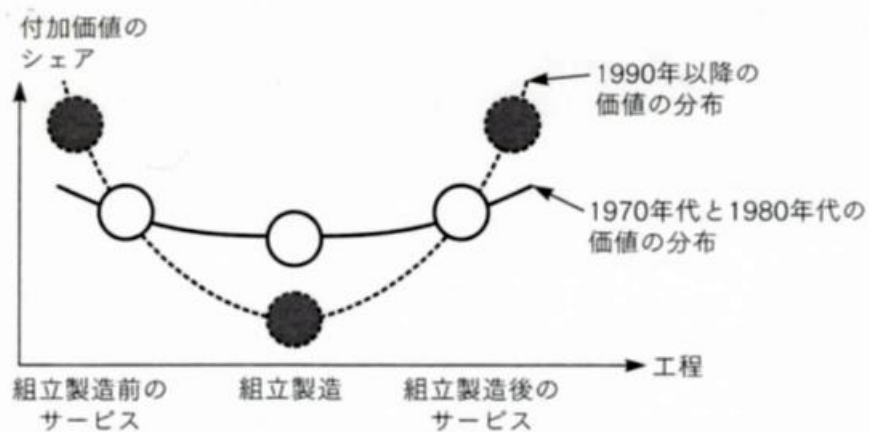


図48 「エレファントカーブ」：第二のアンバンドリングは
世界の中間層と北のエリートに恩恵をもたらした

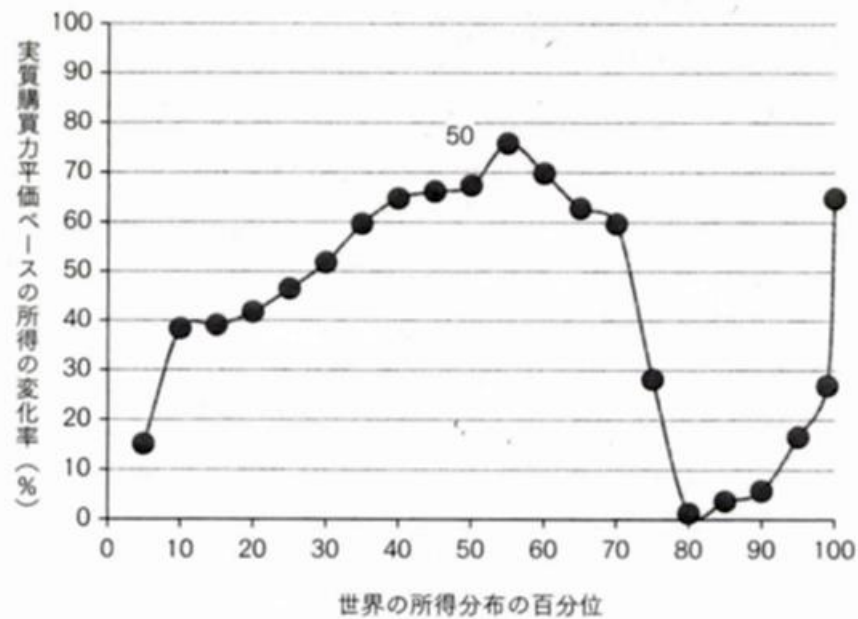


図54 世界の人口とGDPに占める北と南のシェア、紀元1～1990年

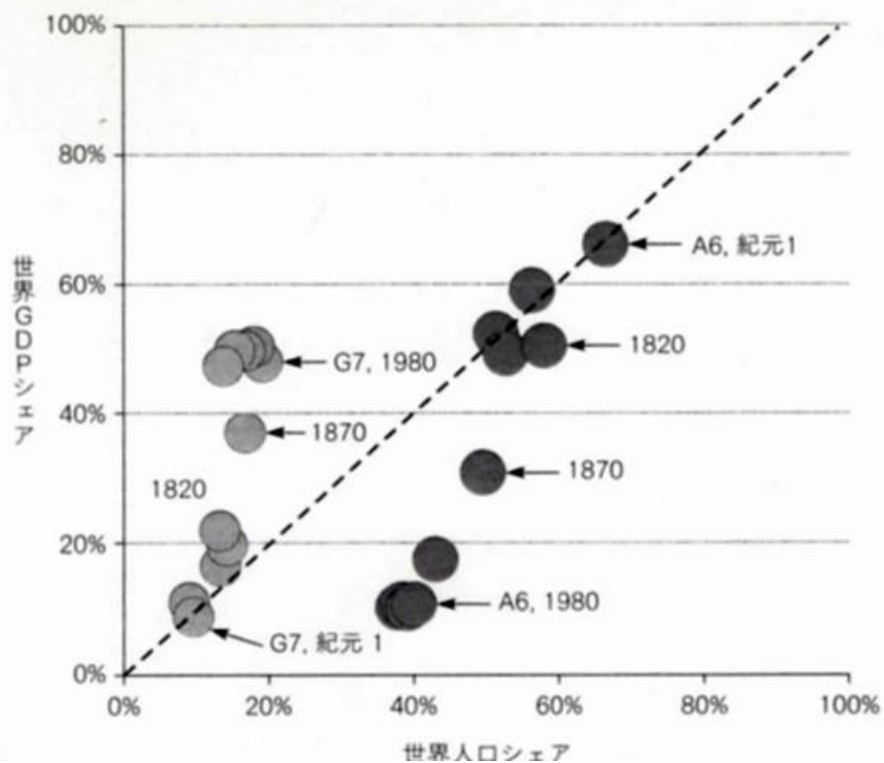


図55 政策のターゲット：粘着性と潜在的なスピルオーバー

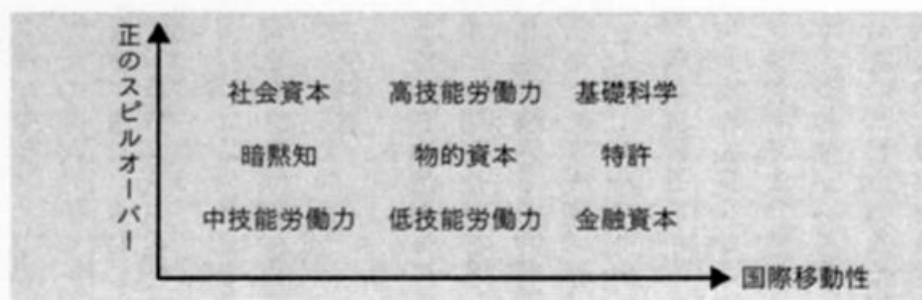


図61 雁対ムクドリ：
第二のアンバンドリングが起きて、経済発展のはしごが崩れた

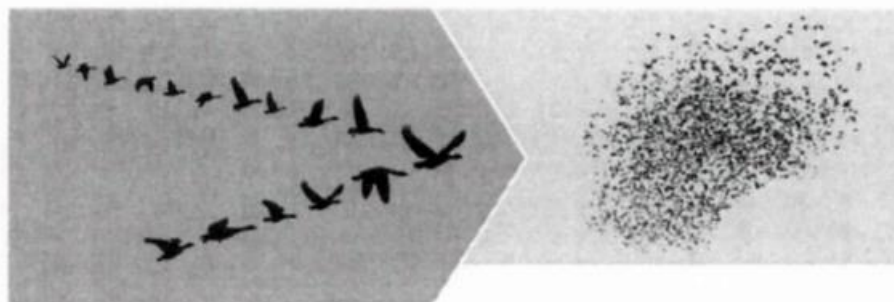
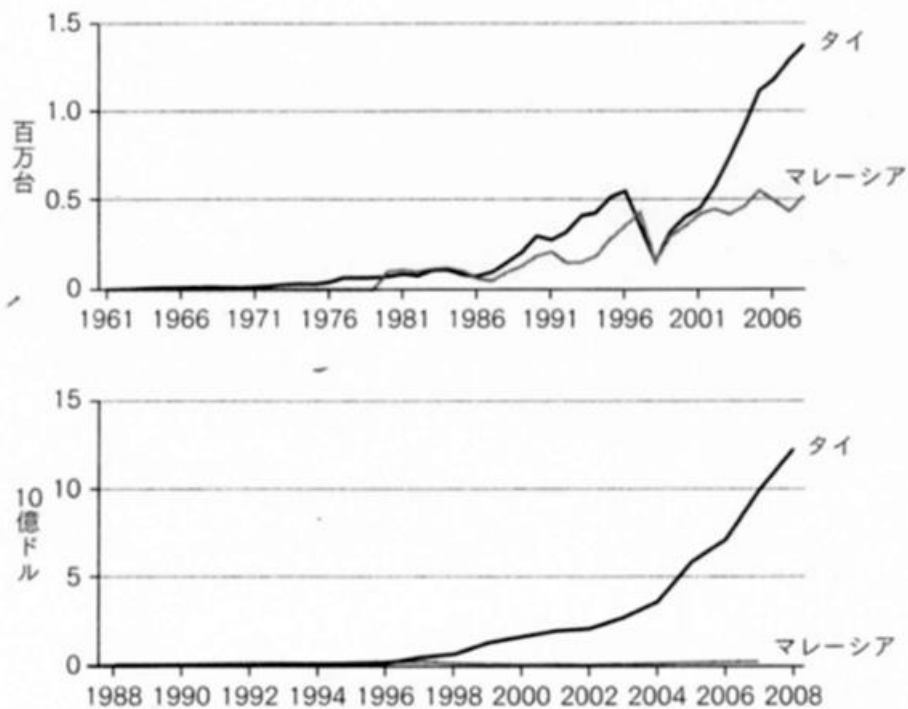


図57 自動車の生産と輸出、タイの成功とマレーシアの失敗



付録 図2 グローバリゼーションとアンバンドリング

	グローバリゼーション以前	オールド・グローバリゼーション	ニュー・グローバリゼーション	未来のグローバリゼーション
	バンドリング	第1のアンバンドリング	第2のアンバンドリング	第3のアンバンドリング
貿易コスト	高	低下	低下	低下
コミュニケーション・コスト	高	高	低下	低下
フェイス・トゥ・フェイス・コスト	高	高	高	低下
ブレークスルー		蒸気機関	ICT革命	さらなるICT革命
距離を克服して動くもの	なし	モノ	アイデア	ヒト
国際分業	自給自足	産業単位	工程単位	ヒト単位
優勢な時期	-1820	1820-1990	1990-2015	2015-
世界の所得分布	古代文明圏からヨーロッパへシフト	豊かな国々（特にG7）の工業発展によりシェア拡大：大いなる分岐	新興市場国の急速な工業化によりシェア拡大、豊かな国のシェア低下：大いなる収斂	
国内の格差 （高度人材 対 単純労働）		先進国：拡大 途上国：縮小	先進国：拡大 途上国：拡大	先進国：拡大 途上国：拡大
出所：木村福成・浦田秀次郎による作成				